

総合的な学習の時間

SDGs を意識した単元学習プログラムと個人テーマ探究活動の充実

ー マルチステークホルダーとの連携・協働を活かしてー

三村 悠美子・竹島 潤・米林 哲郎・横林 慎也・山本 芳幸

1 はじめに

平成 29 年 3 月公示の学習指導要領第 4 章総合的な学習の時間では、目標として、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することが目指されている。この資質・能力の育成に向け、「生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。その際、生徒や学校、地域の実態に応じて、生徒が探究的な見方・考え方を働かせ、教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習や生徒の興味・関心等に基づく学習を行うなど創意工夫を生かした教育活動の充実を図ること。」が求められており、今回の学習指導要領では「まえがき」に、「子供たちに求められる資質・能力とは何かを社会と共有し、連携する『社会に開かれた教育課程』を重視する」ことも示されている。これらを踏まえ、本校では、以下の 3 つを総合的な学習の時間（以下、ER（＝Earth Rise））の目標としている。

- (1) 課題解決に必要な知識及び技能を身に付け、探究的な学習のよさを理解できるようにする。
- (2) 教科学習や自己の経験と関連付けたうえで、見通しや根拠をもって探究の過程を意識して学習を進めることができる。
- (3) 互いのよさを生かしながら、持続可能な社会づくりに参加・参画・貢献・寄与しようとする態度を育てる。

すなわち、持続可能な社会づくりへの意欲と関心をもち、自ら考え・行動できる生徒の育成を目指している。また、本校が所属する岡山大学は、「その理念・目的の下、SDGs（持続可能な開発目標）の達成に貢献する活動に取り組み、持続可能な社会の実現を牽引していく」とした行動指針のもと、SDGs 達成に貢献する取り組みを全学で推進しており、岡山大学の附属校である本校が SDGs を意識した教育活動に取り組むことは持続可能な社会づくりの視点からも極めて重要である。これからの社会を生きていく生徒にとって、SDGs 達成に向けて、今、何が問題なのか、その課題解決に向け自分には何かできるのかを考え、行動する資質・能力を育成することは必要不可欠である。さらに、岡山市は ESD に早くから取り組んできた地であり、2014 年には ESD に関する世界会議も開催されている。2018 年度には「SDGs 未来都市」にも選出されており、岡山は「ESD for SDGs」の基盤が十分にある地である。本校はこれまで教科研究の面で公立校への還元を行ってきたが、総合的な学習においても実践事例を公立校に還元することで、さらに附属学校としての役割を果たすことにつながると考えた。

このような経緯から、本校では 3 年前から ER の学習プログラム改善に着手してきた。以下、今年度の各学年における学習プログラム開発・改善において留意してきたことと実践内容、その成果について述べる。

2 ER で目指す生徒像の実現に向けて

学習プログラム開発にあたっては、SDGs とのつながりを学習内容面で大切にするだけでなく、手立てやプロセスにおいても多様な関係・専門機関等（以下、マルチステークホルダー）との連携・協働を活かした取り組みを大切にしてきた。例えば、第 3 学年 ER「主権・キャリア」では、岡山で活躍する地元議員の方々との意見交換・交流の場をもったり、第 2 学年 ER「こころ」では、専門家のお話を聞いたり、当事者の方々とのオンライン交流を行ったり、第 1 学年 ER「国際」では、洛陽市人民対外友好協会、認定 NPO

法人岡山市日中友好協会、日中青少年交流促進団（NPO 法人 ICOI）と連携し、洛陽外国語学校とのオンライン交流を行ったりした。このように本校では、行政、NPO、外部・専門機関との連携に留意している。その他にも、校内共通研究主題との関連や教科指導の蓄積を生かした指導、「ESD の学習指導過程を構想し展開するために必要な枠組み」（国立教育政策研究所 2012）を意識した社会課題への関心を高める講座制授業、3年間を見通したスパイラルな取り組み【インプットを重視した学年プログラム（第1学年）→グループによるプレ探究（第2学年）→個人探究（第3学年）】、実行委員形式を取り入れて生徒主体の取組の充実を図る、など、SDGs 解決のための ESD 視点を通して、各教科等と ER、学校の学びと実社会・実生活との関連性を高められるよう努めている。また、生徒が課題解決を自ら探究的に行う力を高めるべく、様々な「つながり」を大切にしながら、「問い」を持ちながら学ぶことも大切にしている。そこで、教員研修や各教科会、主題研究部会などを踏まえて、今年度、図1のような年間指導計画を作成した。年間指導計画（図1）をもとに、ERと各学年の教科をつないだ「学びのカレンダー」（図2）、ER 単元学習プログラムごとの「カリキュラム・マップ」（図3）の作成も行った。さらに、今年度は3年生の個人テーマ探究活動を充実させることにも重点を置いて取り組んだ。

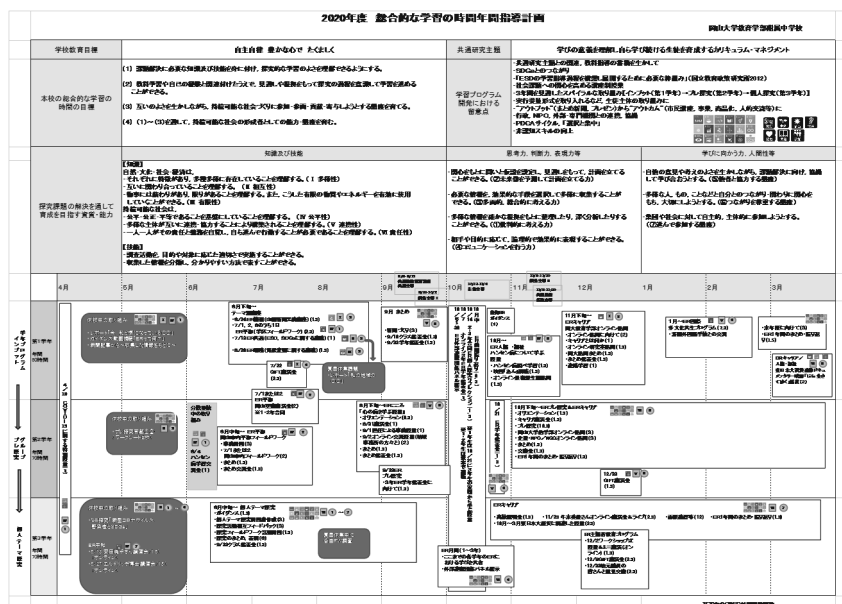


図1 ER 年間指導計画

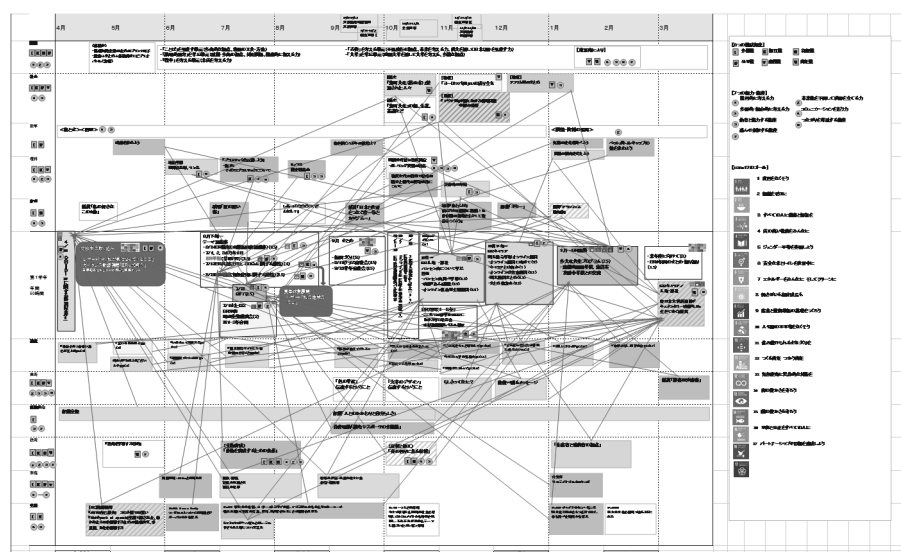


図2 学びのカレンダー（第1学年）

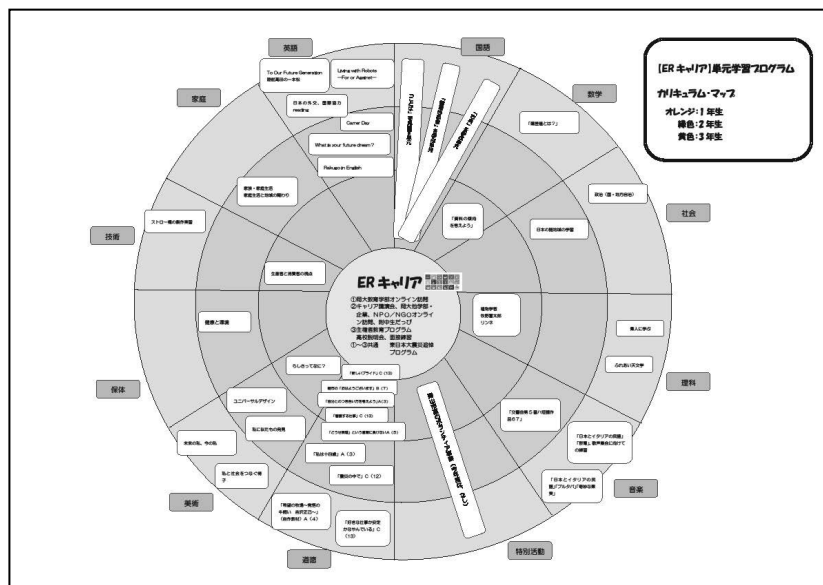


図3 カリキュラム・マップ（ER キャリア）

3 実践の概要

(1) 個人テーマ探究活動（第3学年）

年次進行で行ってきた本校の新しいER 学習プログラムにおいて、個人テーマ探究活動は、令和元年度第3学年から実施している。この学年は、2年次にグループでのプレ探究は行っていなかったため、まず生徒に「どのように『問い』を設定したらよいのか」を伝える必要があった。そのため、4月に第2・3学年合同のER ガイダンスを行い、SDGs と関連付けて考えるとはどういうことか、「問い」をもつとはどういうことかについてワークショップを取り入れながらガイダンスを行った。その他に初年度の個人テーマ探究活動で留意したのは、①探究のプロセスを意識した取り組みにすること、②ER 沖縄宿泊学習（6月）や夏季休業中にフィールド調査を行うこと、③ER 交換会で全員発表を行うこと の3点である。昨年度実施しての成果は、以下の通りである。

- ・一人一人が社会課題に向き合うよい機会になった。
- ・SDGs を関連付けて「問い」を立てたことでこれまでのER の学びとの関連性、継続性を意識した取り組みとなった。
- ・全員発表にすることで交換会の内容そのものの充実が図れた。

また、ER で培われた力を見取るため、教育目標や「ESD の学習指導過程を構想し展開するために必要な枠組み」（国立教育政策研究所 2012）をもとに、ER 自己評価表（図4）を作成した。令和元年度前期末に実施した自己評価では、どの質問項目に対しても第3学年の数値は比較的高いものであり、11の質問項目のうち9項目が3学年の中で一番平均値が高かった。特に数値が高かったのは、「3 自ら問いを立て、積極的に学習に取り組むことができた。（平均：4.76）」、「1 様々な領域に興味・関心を広げて学ぼうとすることができた。（平均：4.67）」、「7 自分の考えを他者に伝えることができた。（平均：4.67）」、「2 他の教科学習と日常生活や地域社会、そしてSDGs との関連性を考えながら学習に取り組むことができた。（平均：4.64）」である。この調査は令和元年度から実施しているため、一昨年度の個人テーマ探究活動を行わなかった第3学年との比較はできないが、質問3や7は他学年と比較した際、他の質問項目に比べ平均値に差があり、数値が高くなったことは個人テーマ探究活動の実施が大きく影響していると考えられる。しかし、同時に次のような課題も見えた。

- ・2年次に「一人で探究を進められるための準備（個人テーマ探究に向けたプレ探究）」を行っていなかったため、十分に探究のプロセスに則った取り組みとは言えない実践もあった。
- ・どうしてもER 沖縄に関わる「問い」が多く、フィールド調査も沖縄宿泊学習時のみになっている生

以上のことから、1年次の学年講座を中心としたインプットの後に、2年次でグループでのプレ探究を経て、3年次の個人探究という流れは、やはり必要であると感じた。

図4 ER 自己評価表

- ・個人テーマ探究活動を行うにあたってのガイダンスの実施
- ・W型問題解決学習や探究のプロセスの意識化
- ・探究計画書の相互フィードバック場面の設定
- ・探究テーマに関わる主SDGsによる、教員アドバイザー制の導入
- ・Google Classroomを活用した、作成スライドの共有、相互コメント

① W型問題解決学習を意識した取り組みは、生徒がさらに学びを深めていくことにつながった。

– 110 –

② 相互にコメントする場面のもち方や作成スライドの共有方法を工夫したことで、限られた時間の中でも充実した学習活動にすることができた。

探究計画書の時点で互いにフィードバックする場面を複数回もったことで、生徒がその後の探究活動をどのように進めていけばよいかの見通しをもつことができた。そして、そのことがその後の情報収集やフィールドワークの充実につながった。また、他者の探究計画書にコメントするという経験が自身の計画書を再考することにもつながり、それが探究活動を深めることにもつながった。さらに、今回、Google Classroom を活用して作成したスライドの共有や相互コメント（アドバイザー教員からのものも含む）を行ったが、互いに落ちついて作業、閲覧・コメントできたことは、探究の充実につながった。

③ 単なるプレゼン発表で終わらず、持続可能な社会づくりに参加・参画・貢献・寄与する生徒の姿が見られた。

例えば、「私達の町に必要とされる道とはどのようなもの？」という問いを立てた生徒は、現状把握のために「視覚障害者の視点から作成した地域の地図」（図5）を作成し、岡山市立操山公民館に自ら掲示を依頼、地域の方々に広報・啓発を行った。そして、その活動が岡山市中区役所地域整備課による点字ブロック修繕計画につながった。また、「なぜ今、エシカルファッションが注目されているのか」という問いを立てた生徒は、市民と行政が連携して取り組む「岡山西総合公園（仮称）活性準備会事業きたながせスープ」で、地域や一般市民の方々に向けて野外プレゼンをしたり、SDGs啓発事業ビデオにインタビュー出演したりした（図6）。このように、「自ら考え・行動できる生徒」が具現化された姿が見られるようになった。



図5



図6

(2) ER キャリアと関連付けた ER プレ探究（第2学年）

今年度は新型コロナウイルス感染・蔓延予防のため、ER 京都宿泊学習が延期・中止となり、昨年度の第2学年のようにER 京都におけるプレ探究は実施することができなかった。また、ER キャリア学習プログラムの一つに位置付けていた多世代交流授業「だっぴ」も同様の理由により延期・中止となった。高等教育機関・地元企業・NPO/NGO への3領域キャリアフィールド訪問も、昨年と同時期に同様の方法で実施することは難しい状況であった。しかし、3年生での個人テーマ探究活動のためには、今年度、探究の進め方、探究の具体について学習しておくことや、昨年度つなげることができた「マルチステークホルダーとのつながり」を継続することが重要である。そこで、2年団ER 担当を中心に学習プログラムについて再考し、第2学年後期のER でER プレ探究を実施することとした。プログラムの詳細は、以下の通りである。

- ・興味・関心のあるSDGsの視点に基づいて生徒を9つのセッションに分け、セッション内で4～5人の小グループを作る。
- ・各セッションには、学年団教員1名が顧問として入る。
- ・グループごとに「問い」を立て、探究活動を行う。
- ・探究活動における情報収集の手段の一つとして、昨年度お世話になった地元企業、NPO/NGO へのオンライン訪問を行う。
- ・探究の成果は、1人1枚のはがき新聞にまとめる（図7）。学級ではがき新聞交流会をもつことで、互いに他のテーマについて探究したグループの学びについて共有する（図8）。

※はがき新聞交流会は、学級の生活班で各自が作成したはがき新聞を回し読みし、その後、各セクション代表1名が教材提示装置で新聞を示しながら、発表を行った。他者の新聞を読んだり発表を聞いたりして、良い点や気付いた点は付箋に記入し、発表者へフィードバックするようにした。

なお、第3学年同様、グループ探究活動を行うにあたってのガイダンスを実施し、探究計画書の相互フィードバックや教員アドバイザー制の導入、Google Classroomを活用した課題の提出、共有、アンケートの実施などを取り入れた。また、第3学年が実施した「個人テーマ探究リフレクション（10/14）」を第2・3学年合同としたことで、探究を進める上での疑問や不安、どのような苦労があったか等、第2学年の生徒が直接先輩に尋ねることができるようにしたことも、その後のプレ探究のスムーズな実施につながった（図9、10）。



図7



図8



図9

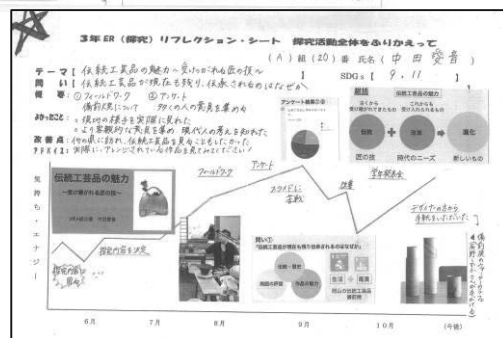


図10

今回、ERプレ探究を実施したことで得られた成果は、以下の通りである。

- ① 生徒は探究のプロセスについて実践を伴って理解することができ、特にどのように「問い」を立てればよいかについて深く理解することができた。

10/14の第2・3学年合同「個人テーマ探究リフレクション」を通じて、生徒は探究の具体や進める上でどのような点に配慮すればよいかを理解することができた。これがリフレクションの実施のみで終わってれば、探究について頭では理解できても、生徒が探究の大変さや面白さを感じることはできなかっただろう。今回、実際に自分たちも探究を行ったことで、「実際に『問い』を立てることの難しさ」や、「『問い』を立てるためには、日々、アンテナを高くして生活することが重要であること」、「インタビューやアンケート調査、フィールドワークなど、実際に見たり、聞いたりすることで情報を得ることは大変効果的であること」に気付くことができていた。また、「どのような『問い』を立てるか」が、その後の探究の深まりに影響することに、生徒だけでなく指導する教員も気付くことができた。

- ② グループで探究を進めたことで、役割を分担しながら活動に余裕をもって取り組むことができた。

第2学年の生徒にとっては今回が初めての探究であったため、やはり『問い』を立てたり、情報収集をしたりする部分で時間がかかったり、どのように進めていけばよいのかを迷っていたりする姿も見られた。しかし、グループ（特に今回は自身が興味・関心のあるSDGsの視点に基づいたグループ）で進めた

ことで、メンバーが『問い』について同じ視点で検討できたり、効率よく情報収集を行ったりすることができた。

③ 昨年度できた「マルチステークホルダーとのつながり」を生かしたプログラムにすることで、生徒の情報収集の幅が広がったと同時に、この「つながり」を今年度も継続することができた。

昨年度お世話になった地元企業、NPO/NGOにオンライン訪問させていただいたことで、その分野の専門家からお話を伺うことができ、生徒が有用な情報を収集できることにつながった。本やインターネットでは分からない生の声を聞き、生徒が五感を伴って専門家の方々の思いや熱量を感じ取れたことは、探究を深めるにあたり、大変効果的であった。そして何より、昨年度構築した「つながり」を途絶えさせず、来年度にもつなげることができたことは、本校のERを継続、発展させていく上で非常に重要であり、「今後（本校の未来）のER」にもつながった。

(3) ER 基礎（第1学年）

第1学年におけるER基礎は、今回の「3年間を見通した学習プログラム」を実施する以前から、数年にわたって実施してきた。しかし、「どのような位置付けで実施するのか」、「このプログラムでは何を押さえないのか」が教員側の意識として統一されておらず、年度によって内容の違いがあり、第2学年、第3学年でのERに生徒の学びが十分つながっているとは言い難い状況であった。「3年間を見通した学習プログラム」の実施を始めた平成30年度からは、各講座での目標を明確に位置付けるとともに、この基礎講座の時点からマルチステークホルダーとの連携・協働に力を入れるようにした。また、ERガイダンスを実施することで、生徒が3年間を見通した上で、第1学年ではどのような視点や力を身に付けることが必要なのか見通しをもてるようにした。今年度は、4・5月が新型コロナウイルス感染・蔓延予防のため臨時休校となったが、ERガイダンス動画を作成し、その視聴を休校中の課題とした。また、これからの3年間でやっていくERの導入にあたるような「今、私が気になっている〇〇」というレポート作成を課題にし、身近な疑問が「問い」につながることで、その疑問を解決するためには情報を収集することが必要で、集めた情報をただ羅列するのではなく、整理・分析してまとめていくことが大切であることを実感できるようにした。そして、レポートの優秀作品を教員が取りまとめ、学年の全生徒にフィードバックした。6月の学校再開後、授業でもER学習を始めたが、これらの導入が大変効果的に働いていた。例えば、それぞれの講座で気付いたことや学んだこと、疑問に思ったこと等を振り返りとして書かせた際、単に感想を述べるだけに終わるのではなく、自分なりにその日の講義内容について深く考え、「これについて聞いてみたい」、「〇〇について自分でも調べてみたい」といった意見が多く見られた。併せて、各講座における目標を明確にし、生徒にも教員にも分かりやすく示したこと、それにより教員間で共通理解をもてたこと、コロナ禍においてもオンラインと教室での外部講師を効果的に活用した講座を実施できたこと等も、生徒の学びを深めることにつながったと考える（図11、12）。また、ER平和のように3年間継続して取り組んでいく内容については、第2・3学年で実施する内容を見通して、第1学年でのER平和講座の内容を再考し、より3年間の学びのつながりを意識して取り組んだ。このような学びを重ねた結果、生徒たちは10月に実施された第3学年代表生徒による個人テーマ探究発表を聞いた際、探究することの奥深さを感じるとともに、今後の自分が目指す姿について考えることができていた。これらの取組が、前期末に実施したER自己評価で第1学年が高い数値を示したことにもつながったと考える。詳細については、以下、4 成果と今後の取り組みで述べる。

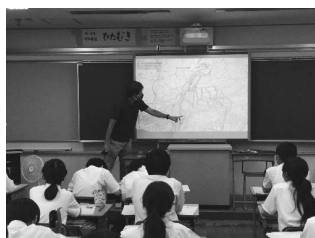


図 11



図 12

4 成果と今後の取り組み

今年度前期末（10月）に実施したER自己評価の結果を踏まえ、以下、成果と課題、今後の取り組みについて述べる（結果については、図13を参照）。



図13 ER自己評価結果

今年度前期末の結果では、11の質問すべてで第3学年の生徒が一番高い肯定的回答率であった。これらの要因として、この学年は3年間を見通した総合カリキュラム（教科横断型プログラム）を先導的に行ってきた学年であること、ER 個人テーマ探究活動を実施・充実したこと、個人テーマ探究活動の中で個々に現地・現場におけるフィールドワークを実施したこと、クラス・学年・全校・関係者（機関）も含む「ER 個人テーマ探究実践発表会（10／7）」を実施したことが挙げられる。

全校で平均値が高かった上位3項目は、「8 他者との考えの違いを分かり、聴き入れることができた。（平均：4.65／3年生平均：4.78）」、「1 様々な領域に興味・関心を広げて学ぼうとすることができた。（平均：4.60／3年生平均：4.77）」、「2 他の教科学習と日常生活や地域社会、そしてSDGsとの関連性を考えながら学習に取り組むことができた。（平均：4.55／3年生平均：4.76）」であった。これは、様々な「つながり」を意図的につくってきた成果、そして、問いをもちながら学ぶことを生徒に意識付けてきた成果と言える。そして、3年間を見通した学習プログラムを実施することは、生徒の学びに継続性、段階性を生むことにつながり、生徒自身が学びを深め、高めていこうという意欲につながったと考える。

全校での下位3項目は、「4 課題を解決する時に、見通しを持ち、解決に必要な計画を立てることができた。（平均：4.24）」、「10 持続可能な社会の構築のために、多様な他者と連携・協働しながら、課題の解決に取り組むことができた。（平均：4.25）」、「11 深めてきた自分の考えを他者に分かりやすく伝えることができた。（平均：4.27）」であった。しかし、第3学年で言えば、質問4は平均4.52、質問10は4.50、質問11は4.62であり、寧ろ高い数値である。この結果から、新しく学習するもの、ことへの関心・意欲は高いが、全体では行動面にまだ課題のある生徒も多いと言える。ただ、第1・2学年の数値が低めになっていたが、これは1・2年次にそもそも学習や探究の計画を立てたり、課題解決に取り組んだりする機会が少ないことに課題があると言える。これらを改善するために、今後は第1・2学年の取り組みから実行委員形式や探究活動を取り入れていきたい。なお、第1学年でのインプット、第2学年でのインプットとプレ探究が十分にあったことで、今年度の第3学年での個人テーマ探究の充実につながったことも事実である。各学年ER担当教員による係会を実施し、各学年の取り組みについて十分吟味した上で、プログラムの改善に取り組んでいきたい。また、ここでER新学習プログラムの1サイクルが終わるので、継続するものとブラッシュアップするものの精査も必要である。これについても、係会で検討していきたい。

今後は、生徒外部発信の一層の充実、教科での学びとERのつながりをより「見える化」していきたい。今年度、「ER 個人テーマ探究実践発表会（10／7）」をオンラインで実施したが、岡山朝日高等学校、岡山東商業高等学校、山陽学園高等学校など本校近隣の高等学校、岡山市教育研究研修センターの方やNPO関係者、県議会議員の方々、本校の全体研究に関わってくださっている指導助言の先生方など総勢27名にご参加いただいた。参加者からは、「コロナの状況に負けずにこれだけの成果を出された生徒に感動した。附属中学校の先進的な取り組みがロールモデルとなり、全国にこの理論、考え方、手法が広まるとよいと思う。」「どのような人材を育てたいか、どのような力を生徒に付けたいのかなどの目的がはっきり見え、内容が素晴らしいと感じた。」等のご感想、「学びに積極的でない生徒に対する手立てがあるか。」や「意見交換や質疑応答がより自然で積極的な参加があるとよい。」等の助言をいただいた。生徒の取組を外部発信することは、多様な他者からフィードバックをもらえることにつながり、生徒は手応えや達成感を感じることができる。教員にとっては、フィードバックが指導方法、内容をブラッシュアップすることにつながり、それは全て生徒の学びの充実、本校のERが目指す生徒を育成することにつながる。さらに、新学習指導要領において高等学校では「総合的な探究の時間」が実施されるが、今回、高等学校の先生方に本校の取組を見ていただいたことは、中高連携の点からも非常に効果的であったと考える。今後もERの取組を積極的に発信していきたい。そして、今年度、「学びのカレンダー」や「カリキュラム・マップ」を作成したが、これらの効果的な運用について考え、実際に活用していきたい。

また、本校のERで育成を目指す資質・能力は、「ESDの学習指導過程を構想し展開するために必要な枠組み」（国立教育政策研究所2012）を参考に設定しているが、UNESCOの「持続可能性キー・コンピテンシ

一」(2017)等を参考にしながら、育成を目指す資質・能力の検討もしていきたい。評価については、現在、ER自己評価表によってERで育成された資質・能力を見取っているが、全体研究で取り入れている外部評価指標Ai GROWとER自己評価を関連付け、ERで育成された資質・能力についてより説得力のある結果として示していけたらと考えている。

さらに、今年度、本校では「岡大附中ESD・SDGs推進部会」を設置し(岡山ESDプロジェクト参加)、部会として岡山市が主催するESDコーディネーター養成研修にも参加した。研修を通じて、学校と地域や多様な世代、セクター、そして学校間をつないでいくことの重要性を改めて感じると共に、学校での取組を外部発信することの重要性についても再認識することができた。また、研修に参加したことで、新たなつながり、新たな視点を得ることができた。今後、岡山市立東山・操山公民館など近隣の機関と連携し、若者の地域参加・参画により、世代を越えたつながりを生かしたプログラム「みんなでつくろう!住み続けたいまち〇〇」(仮称)を計画、実施していく予定である。

今後も「本校のERによって育てたい生徒像」のビジョンを明確にもち、学習プログラム開発、指導にあたっていきたい。

参考文献

- 1) 文部科学省(2017)『中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』
- 2) 国立教育政策研究所(2020)『指導と評価の一体化ための学習評価に関する参考資料(中学校 総合的な学習の時間)』